

巻頭言

Preface

岸井隆幸¹

By Takayuki KISHII

2020年は56年ぶりにオリンピック・パラリンピックが東京で開催される予定であった。いよいよ本番というその時、中国から原因不明の肺炎に関する報告があり、世界の風景は一変した。

ウィルスは自力で遠くまで動けるような代物ではない。感染拡大は人がいかに広く移動し、多くの人と交わっているかを示している。「シルクロード」から「一带一路」へ、中国から欧州への空間距離は同じであってもその社会距離は格段に縮まっていた。

今回のコロナ危機に対し、各国は強制力を持って入国を規制し、都市を封鎖し、人々の活動を禁止・自粛させた。人という媒体の活動を抑制する方法である。ただ、社会は人間活動の連鎖であり、結局「WEBで補完する」方法がとられ、そして一気にWEB会議や在宅勤務が身近なものとなった。こうした急激な変化はわが国の都市に何をもたらすのだろうか？

まず、短期的には、商店街の疲弊がさらに深刻化することが懸念される。

既に郊外ショッピングセンターやネット通販の普及で、近隣の商店街は大きな影響を受けていた。今や小売店舗より「体で受けとめるサービス」（整体関連、理美容室、スポーツジム、デイケアセンター、飲食店など）が目につく商店街も多い。しかし、今回はこうしたサービスが抑制の対象となった。しかも、支援材料であった観光客は激減し、V字回復するかどうか定かではない。世界全体の安定が確認されないとクルーズ船や飛行機に乗ることへの抵抗は続くかもしれない。こうした厳しい環境下で、これを機に店をたたもうという方が増えてもおかしくない。

一方、今回在宅勤務の可能性が確認されたことは別の大きな変化をもたらす。週2回交代で在宅勤務を行えば交通需要のピークが削減されるし、オフィス需要等も変わるかもしれない。食寝分離が近代住宅思想の産物であるのと同じように、職住分離は近代工業社会の産物であった。こうした機能分離主義に代わり、身近なところから機能の混在・融合が進む可能性は高い。

では、中長期的にはどうだろうか？

今回の感染は世界的な規模であり、全ての国で感染を抑え込まない限り、次の波への懸念で世界は安定することができない。未だ先進国といえども自国で手一杯というところだが、ここでどういった協調をとることができるかは次の世界の姿に大きな影響を与える。いつか安定した時を取り戻したときに、世界の国々は何を思い起こすのか、よく考えなければならない。

また、今回はWEB空間が実空間を補完したが、実はWEB空間に発生するウィルスはコロナウィルスをはるかに超える感染力・伝搬力を有している。このWEB空間を誰が管理すべきなのか、できるのか、は大きな課題である。WEBウィルスはインターネットに依存しているIoT社会システムそのものを破壊する。この時も最後の手段はシャットダウンである。しかし、その影響は都市のロックダウンをはるかに超えるものとなる。我々はこうした脅威にも備えなければならない。WEBから切り離されたサブシステムをあらかじめ社会が用意しておく必要がある。

コロナ危機で世界は大きく揺らいでいる、変化を余儀なくされている。

「人・モノ・情報の移動」はどう変わるべきなのか？この答えを必死で探さなければならない。

¹一般財団法人計量計画研究所 代表理事 博士（工学）